

私の

# キャリア チェンジ

vol. 23

千葉県立 東金病院  
(千葉県)

## 病 診連携に関心を 寄せて家庭医を めざし、今、 地域医療に深くかかわる

後期レジデント  
賀来 敦氏



Atsushi Kaku  
2000年 岡山大学薬学部大学院卒業  
大手製薬会社に入社  
01年 保険薬局薬剤師として勤務  
03年 旭川医科大学に編入学  
08年 旭川医科大学卒業  
北斗病院にて初期研修  
千葉県立東金病院にて家庭医・  
総合医後期研修

before

家庭医・総合医課程で後期研修中の賀来敦氏は、国立大学薬学部大学院を卒業後、大手製薬会社のMRとして働いていた時期がある。そのときにかかわったのが病診連携のネットワークづくりだった。MRが地域の診療所と基幹病院の仲介役となり、連携を支援する活動を通し、賀来氏は現場の医療者として病診連携を実践したいと考えるようになった。そこで医師になるため、医学部に編入学した。

病診連携に強い関心を持っていた賀来氏は、医学部在学中に千葉県立東金病院の平井愛山院長が構築した「わかしおネットワーク」を見学するために、同院を訪れたことがあるという。当時を振り返り、「とにかくすごい、

after

一言に尽きました。病院、診療所だけでなく、薬局、老人保健施設、訪問看護ステーションまで、地域のあらゆる医療資源にネットワークを広げた実証実験に目を見張りました。使い勝手に多少の問題はあったけれど、ITを活用したヒューマンネットワークづくりに可能性と未来を感じました」と話す。これが賀来氏と千葉県立東金病院の最初の出合いだった。

その後、卒業後の進路を決めるにあたり、賀来氏は家庭医・総合医をめざそうと考えた。この分野なら、薬剤師時代に自分が習得した薬剤の知識や技術を生かしやすいと思ったからだ。そのとき、研修施設を探すためのセミナーで、平井院長と再び出会うことになる。「千葉県立東金病院に興味はあったけれど、研修病院ではないと思って

の機会はなかった」。今後は医療者へのコミュニケーション教育にも積極的に携わっていきたいと抱負を語る。病診連携のネットワークづくりに惹かれて医師となり、その最先端の病院で研修を受ける賀来氏がこう考えるのは必然的なことなのかもしれない。

welcome

「当院が家庭医・総合医課程の後期研修を立ち上げたのは07年になります。現在、賀来先生を含め、3人のレジデントが研修中です」と、古垣齊拡氏は説明する。物事に対して前向きに、かつ真摯に取り組む賀来氏に加わったことで、他の研修医が刺激を受け、現場が活性化すると評価する。「指導医だけが頑張っても、よい研修

ができるものではありません。研修医同士が刺激し合ったり、助け合ったりすることも大切です。これからは全員で成長してゆけるよう、賀来先生にはリーダーシップを発揮してもらいたい」と、古垣氏は期待を込める。一方で、こんな注文も――。「家庭医・総合医が対象とするのは地域で、そこにはさまざまな年齢層の人々が暮らし、貧富の差もあります。バリエーション豊かな患者に合わせた診療を行っていかねばならないので、その素養を身につけるため、いろいろなところにアンテナを張り、自分の引き出しを増やす作業を心がけてほしい」。同院では研修医が順調に育ってきたことにより若手中心の現場になりつつある。そういう面においてもやりがいのある職場だ。「診療の担い手となり、つらいことも多いと思いますが、じっくり腰を据えて、数年間粘り強く取り組み、どこに行っても通用する家庭医・総合医になると期待して育成しています。彼ならば、きっと成功するでしょう」と、古垣氏はエールを送る。社会経験を積み、医療コミュニケーションにも深い関心を寄せる賀来氏が家庭医・総合医としてどのように成長し、地域医療にかかわっていくのか、その将来が楽しみである。

## 家庭医の本領を 発揮するために 引き出しを増やす努力を

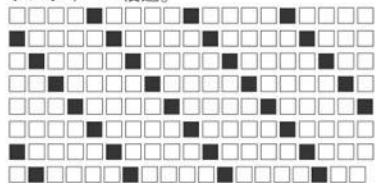
内科副部長・地域医療連携室室長

古垣 齊拡氏



Furugaki Narihiro

プロフィール後送。



文・渡辺 千鶴



56ページからの全国求人情報もご覧ください!